（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　松岡（まつおか）　智之（ともゆき）

本論文は、『源氏物語』が平安朝のさまざまな歴史的・文化史的事象を取り込みながら作品世界を形成しているありかたを、日本史学・美術史学等の隣接諸学の最近の研究成果にも裏付けられた斬新な視点からの分析によって解明したものである。全体は４部に分けられた 11 編の論考からなる。

第一部「源氏物語誕生の基盤」は、受領階層と作品形成との関わりを扱う。従来この問題は、作者が文人的受領の娘であったことから物語作家としての批判的精神が培われたとされてきたのであるが、本論文では、物語に描かれた受領像を具体的・総合的に検証して、それらがむしろ光源氏の超越的な高貴さの形象に収斂してゆくものであることを明らかにし、作者がその出身階層の価値観や不遇意識などに単純に同化し共感する次元を越え出たところではじめて、『源氏物語』という虚構の物語の創造が可能になったのだと論ずる。

第二部「源氏物語の内なる漢と和」は、桐壺巻において物語が、宇多上皇の描いた「長恨歌」の絵に言及しつつ、しかし桐壺の更衣は楊貴妃に比べて「なつかしうらうたげ」であったとしている点と、少女の巻で、光源氏が衰退していた大学寮を再興して子息夕霧を入学させ、漢学を学ばせたという二点を取り上げて、前者には、新羅との緊張のなかで神国意識が高揚するとともに、絵画・彫刻等においても和風化が進んでいた宇多朝に対する作者の慧眼な歴史認識がうかがわれるとし、後者においては、源氏が藤氏を圧して栄えつつ冷泉聖代が出現するという虚構の物語を支えるために、漢文学が隆盛した嵯峨朝や、菅原道真のような文人を重用した宇多朝のありかたがふまえられている、と論じている。

第三部「源氏物語と仏教思想」と第四部「源氏物語の生活思想」は、仏道信仰と愛執の葛藤、死、女性美、寝具といったさまざまなモチーフを扱っているが、いずれも物語の表現に即した分析を通して、物語の作品形成に関わる思想や観念のありようを浮かび上がらせてゆくという方法において共通するユニークな諸論考から成っている。第一・二部の手堅い論証に対して、この第三・四部には、着眼の斬新さとさしかえに、論にやや精練を欠く部分をなしとしないが、全体として本論文には、表現に即した微視的な分析を文化史的な巨視的問題へと開いてゆく、源氏物語研究の新しい方向性が示されており、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。